

野沢敏治氏の書評への返答

内田 弘

野沢敏治氏に拙著『三木清——個性者の構想力——』の書評を執筆していただいた。こころより感謝申し上げる。その書評を読んで、拙著に費やした長く貴重な時間と労苦が報いられたとの感激を覚えるし、つぎの仕事への励ましを受けた思いもする。同時に、野沢氏の真摯な学問的態度に対応する内容を拙著がどこまでそなえているかと反省させられる。その反省に立って、野沢氏が指摘している問題点について、いま考えることを記す。

第1に、野沢氏は、飯沼二郎・河野健二・内田義彦などを参考に立てた私の仮説概念「地主国家資本主義」からする日本資本主義原蓄期の理解が「かなり流通主義的であって産業構造論的ではない」と評される。資本主義的生産様式は基本的に原蓄要素「資金・労働力・土地・技術」で組織され、「流通部面」の「資金」こそが「労働力・技術・土地」を組織するから「流通主義的」にみえるのではなかろうか。かつての日本農民の小作料が物納制であり、その商品販売は地主に委ねられ、地主は地代資金を商工業金融投資に回し農業投資を二次的にした。そのため農業の低い生産力に規定された貧困が農民を大陸侵略に動員する要因となったと拙著では指摘した。その仮説概念からの原蓄期産業構造の分析は今後の課題である。

第2に、野沢氏は「三木清は『近代の超克』を急ぐことはなかったか」、「近代化がなぜファシズムを発生したのか」と重大な問題を提起した。三木は保田与重郎ら日本浪漫派を批判し、「近代の超克」という表現を肯定的に用いなかった。三木は1942年の1年間、陸軍報道員としてフィリピンに派遣されなかったとしても、座談会「近代の超克」（『文学界』1942年9月-10月）に参加する可能性は全くなかつ

た。三木は日本ファシズムの発生根拠を、日本資本主義の「行詰まり」と、日本人に人格的一貫性＝「人間類型」が欠けていること（ファシズムを含む「外国文化の無限受容」）に求めていた。普通の人々が構想力で創造的な制作活動（ポイエーシス）に励み「人間類型」を形成することにこそ、日本資本主義の矛盾の「解決」（止揚）の基礎を求めていた。三木は、尾崎秀実と同様、（1）日本の知識人と大衆の連帯、（2）中国民衆の民族主義、（3）ソヴィエトの「社会主義」経験の総合に、その「解決」を託した。三木は商品＝貨幣関係の形態規定性が個々人の社会的自立性の確立と自他に対する社会的評価基準を育てる側面を、むしろ大塚久雄に継承される「人間類型論」でとらえていた。視野をアリストテレスのポイエーシス論に広げると、内田義彦や平田清明の芸術・職人芸・社会運動への関心の動機が見えてくる。その視野から三木はマルクスの「労働の根源性」と「存在の歴史性」の思想を評価した。マルクスは労働過程論でもアリストテレーカーであった。

第3に、野沢氏は、三木清が戦争体制に内在しながら、平和へ転轍機を切り替えようとした危うさを指摘し、「どこかで手を切ることが必要ではなかったか」と見る。三木評価をめぐるクリティカルな点である。1940年10月、「昭和研究会」が解散する。三木清はその解散にあくまで反対した。解散直後、「大政翼賛会」ができる。三木は大政翼賛会に参加しなかった。ここで三木清は「手を切った」のである（『昭和史探訪（3）』23頁など参照）。しかし、三木はその後も『構想力の論理』を執筆し続け、「生活文化と生活技術」、『社会科学新辞典』、「日本文化とデモクラシー」、「技術哲学」、「指導者論」、

「戦時認識の基調」などを執筆・編集して、時局に関与した。人間の人格的一貫性＝主体性を重視する三木は時局から一切「手を切って」傍観するより、平和への一縷の可能性にも賭けた。戦時権力はその三木を注視していた。三木評価は、評価する私たち自身の生き方を反照することになると思う。